

利用者の家族が捉えた訪問看護師の役割と 多職種連携の実際

The roles of visiting nurses which are taken things by patients family
and the practical side of Interprofessional Work.

石川 徳子

Tokuko ISHIKAWA

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：利用者の家族 訪問看護師 役割 多職種 連携

I. はじめに

わが国の総人口は、平成29（2017）年10月1日現在、1億2,671万人となっている。65歳以上人口は、3,515万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）は27.7%となった。「団塊の世代」が75歳以上になる2025年には3,677万人に達すると見込まれている。その後も65歳以上人口は増加傾向が続き、2042年に3,935万人でピークを迎え、その後は減少に転じると推計されている¹⁾。

国は、2025年を目途に、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援のもとで、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい人生を最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を目指している。また、医療と介護の連携については、関係機関が連携し、多職種協働により在宅医療・介護を一体的に提供できる体制を構築するための取組を推進している²⁾。これを受け在宅看護は、地域住民が疾病を抱えても、自宅等の住み慣れた生活の場で療養し、自分らしい生活を継続できるよう多職種と連携しながら対応している。さらに、訪問看護ステーション数も2017年4月1日現在、9,735事業所と増加している³⁾。

訪問看護師の多職種との協働実践力においては、「チーム機能の改善・発揮」、「チームメンバーの尊重」の2つの因子が明らかになっている⁴⁾。しかし、利用者や家族が捉えている訪問看護師と多職種連携については明らかになっていない。利用者の家族が捉えた訪問看護師の役割については、「訪問看護を利用前は何をしているのか詳しい事はわからない」、「訪問看護には自分にはできないサービスを選ぶ」、「入院しないための手段である」、「状

態の変化に対応し方向を示してほしい」、「容態が変わったり困った時に24時間の対応をしてほしい」、「利用者・介護者を支えてほしい」の6つが明らかになっている⁵⁾。

そのようななか、公益財団法人日本財団（以下、日本財団）においては、公益財団法人笹川記念保健協力財団（以下、笹川財団）とともに、看護師を中心とする新たな地域の保健医療の拠点となりうる「日本財団在宅看護センター」を起業し、運営する看護師の育成事業を2014年から開始した。骨子はこれからの日本の地域社会の健康を支える鍵は、キュア（cure 治療）よりケア（care 看護・介護）に力を発揮できる看護師による多職種協調を基本とする考えである⁶⁾。

そこで、住み慣れた地域（住まい）で生活ができる手がかりを得るために、利用者と家族が捉えている①訪問看護師の役割、②多職種との連携を明らかにする事が、地域包括ケアシステムに対応できると考え、本研究を実施した。

II. 研究目的

訪問看護師の役割を地域に周知してもらい、多職種との具体的な連携を明らかにし、利用者と家族が住み慣れた地域（住まい）で生活できる手がかりを得る。

【用語の定義】

連携：連絡を密に取り合い、一つの目的のために一緒に物事をする事。

III. 研究方法

1. 調査対象

インタビューの同意を得られた訪問看護ステーションで、訪問看護師と訪問看護師以外の職種の訪問を利用し

ている利用者と家族5組以上とした。

2. 調査時期

2018年8月8日～8月15日に実施した。

3. インタビューガイドの内容

- 1) 利用者の属性：性別・年齢・要介護度・疾患・居住地・訪問看護利用期間と訪問頻度・訪問看護師以外の利用職種・訪問頻度
- 2) 介護者の属性：性別・年齢・利用者との続柄
- 3) インタビューの内容：①訪問看護師の訪問から感じている事、②訪問看護師以外の職種の訪問から感じている事、③訪問看護師とそれ以外の職種は、どのように連携しているかを自由に語ってもらった。語った内容について許可を得てICレコーダーに録音し、その後逐語録を作成した。インタビューは利用者の自宅に訪問して行い、面接時間は30分から40分であった。

4. データ分析方法

本研究は、テキストマイニングという手法を用いた。テキストマイニングとは、テキストデータをマイニング(発掘)して宝物(情報・知識・知見・仮説・課題など)を見つける手法・プロセスである⁷⁾。テキストマイニングを選択した理由は、客観的に分析軸を検討出来、人の手による分析では見えなかった結果が見えてくるからである。

インタビュー内容について「NTT データ数理システム Text Mining Studio Ver 6.0.3」を用いて、分析開始前の前処理である分かち書き、削除後・類義語辞書編集のあと、単語頻度解析、対応バブル分析を行った。

分かち書きとは、文法的に意味づけが可能な最小単位である形態素に分ける作業で、単語や品詞単位の分類である。例えば、「意欲が低下して不安が強かった事もあり、療養方針を決めに行った」というテキストデータは、「意欲(一般名詞)」、「低下(サ変接続名詞)」、「不安(形容動詞語名詞)」、「強い(自立形容詞)」、「療養方針(サ変接続名詞)」、「決め(一般名詞)」、「行く(自立動詞)」に分類される。

分かち書きの後、類義語辞書を編集した。類義語辞書は分析を進める場合に同一の単語として扱いたい単語のグループを決める作業である。例えば、「ケアマネ」、「ケアマネさん」、「ケアマネジャー」といった単語を「ケアマネジャー」として1つにして扱い、分析したい場合には類義語辞書の編集をして、単語のグループとして扱うものである⁸⁾。

また、テキストデータには利用者家族の言葉にくせがあり、意味のない単語は削除した。例えば、テキストデータの最後に「〇〇とかさ」という場合、「かさ」がひとつの単語として示されたため、意味のない単語は、原文参照し削除語とした。

基本情報⁹⁾とは、分析を行うテキストの行数、延べ単語数などの基本情報を集計して出力する。

単語頻度分析¹⁰⁾とは、どのような単語が何回出現するかカウントし、この後に行う様々な分析の指針となる結果を出力する。

対応バブル分析¹¹⁾とは、テキストの中の単語や表現と属性との関係を2次元に表示する。単語や表現の使われ方が似ている、あるいは距離の近い属性(テキスト以外の情報、例えば年齢や性別)は、近くに表示される。なお、図上の2点の近さに意味はあるが、軸には意味がない。構成要素の出現頻度を定量化し、視覚化技術を追加することで、分析をわかりやすく示している。

1) データの事前処理

削除語

- ・「〇〇とかさ」という場合、「かさ」がひとつの単語として示されたため、「かさ」を削除語とした。
- ・「□□はね」という場合、「はね」がひとつの単語として示されたため、「はね」を削除語とした。

類義語

- ・「ケアマネ」、「ケアマネさん」、「ケアマネジャー」は「ケアマネジャー」を代表語とした。
- ・「看護師」、「訪問看護師さん」、「ナース」は「訪問看護師」を代表語とした。
- ・「ヘルパー」、「ヘルパーさん」、「介護さん」、「介護」は「ヘルパー」を代表語とした。

IV. 倫理上の配慮

本研究は所属大学研究倫理審査委員会にて承認を得た(2018.8.2 第513番)。

対象施設の所属長に許可を得た上で、研究協力者に対し、研究目的・方法・プライバシーの厳守、研究への参加は自由意思であること、守秘義務について文書にて説明し文書で同意を得た。また、得られたデータは施錠可能な部屋の施錠可能なロッカーに保管した。

V. 結果

1. 調査対象

インタビューの同意を得られたG訪問看護ステーション(東京都)の利用者家族6組を選定した。全員が介護保険の利用者であり、要介護者であった。利用者は男性3名、女性3名であり、3名が後期高齢者であった。利用者本人は認知機能の低下や眠気が強く休まれており、インタビューに同席していても参加は困難であった。そのため、利用者の家族にインタビューを実施した。B氏のみ、長女・次女の二人がインタビューに参加した。サービスの利用については、全員が訪問看護師による訪問が1回/週、介護保険利用者のためケアマネジャーの訪問は1回/月、それ以外のサービスは多様であった。

表1 利用者と家族の情報

	A	B	C	D	E	F
年齢	70歳代前半	80歳後半	80歳代前半	60歳代後半	60歳代後半	80歳代後半
性別	男性	男性	女性	男性	女性	女性
要介護度	要介護3	要介護4	要介護2	要介護4	要支援2	要介護2
疾患名	脳血管疾患	心疾患	脳血管疾患 循環器疾患	精神疾患 泌尿器疾患	循環器疾患 代謝疾患他	脳神経疾患
訪問看護師 利用期間と 頻度	1年11カ月 1回/週	10か月 1回/週	1年6か月 1回/週	1年10か月 1回/週	2年6か月 1回/週	1年5か月 1回/週
訪問看護師 以外の訪問 と頻度	PT 2回/週 入浴2回/週 CM 1回/月	H・H2回/週 CM 1回/月	PT 1回/週 デイ1回/週 CM 1回/月	デイ1回/週 CM 1回/月	PT 2回/週 H・H1回/週 CM 1回/月	デイ1回/週 H・H6回/週 Dr 1回/2週 CM 1回/月
家族の年齢	70歳代前半	60歳代前半 50歳代後半	80歳代前半	60歳代後半	40歳代前半	50歳代後半
家族の性別	女性	女性	男性	男性	女性	女性
続柄	妻	長女 二女	夫	弟	長女	長女

PT：理学療法士

入浴：訪問入浴サービス

CM：ケアマネジャー

H・H：ホームヘルパー

デイ：デイサービス

Dr：医師

2. インタビューガイドの内容

訪問看護師の訪問から感じている事と訪問看護師以外の職種の訪問から感じている事、訪問看護師とそれ以外の職種はどのように連携しているかを自由に語ってもらった。しかし、訪問看護師以外の職種の訪問から感じている事とその連携については、分けて話をする事が難しく、インタビューでは両方の内容が入り混じったため、多職種がどのように連携しているかについて語ってもらった。

3. テキストマイニングからの結果

1) 基本情報

(1) 訪問看護師の役割

総行数はテキストデータの行数(件数)を表し7であった。平均行長(文字数)は1行(件)あたりの文字数を表し、1583.4であった。総文章数は文章の数で297であった。延べ単語数は、単語の総数になり2088であった。どんな単語が何回出てくるかではなく、単語単位に区切られたものがいくつあるかを表す。単語種別数は669あり、どんな単語が何種類出てきているか表す。品詞出現回数では、名詞が819、動詞が422、形容詞が96であった。

(2) 多職種連携

総行数は7、平均行長(文字数)は1841.0、総文章数は369、延べ単語数は2440、単語種別数は738であった。品詞出現回数では、名詞が908、動詞が521、形容詞が141であった。

2) 単語頻度解析

(1) 訪問看護師の役割

単語頻度解析では、テキストに出現する単語の回数をカウントした。名詞が品詞出現回数で多いが、訪問看護師についての文章なので上位に訪問看護師が多いのは必然的であり、抽出品詞は動詞で設定した。原文から得られた単語頻度解析の上位5位の結果が表2-1である。調査対象が7名のためテキストデータ総行数の最高頻度は7である。

「わかる+ない(分からない)」は7名とも使用していた。6名が「やる」、「思う」、「来る」、5名が「見る」を使用していた。今回は、7名とも使用していた「わかる+ない(分からない)」について原文を確認した。

「分かる+ない(分からない)」では、「私たちは色々分からないんでケアは。それこうの方がいいですよって言ってくれたり、やっぱり分からないことだらけだっ

表2-1 単語頻度分析

訪問看護師の役割 (動詞)

単語	品詞詳細	頻度
分かる+ない	一般	7
やる	非自立可能	6
思う	一般	6
来る	非自立可能	6
見る	非自立可能	5

たんで、質問すると答えていただけたんで助かっています。病院の先生もいるんですけど、心臓の専門の医師なんで、それ以上のことは分からない。」「訪問看護師をお願いして、少しでも長く家にいて、母の時はそれができなかったもんですから、父の時はこれだけことをやってもらえるというのは、入ってもらわないと分からない。」と姉妹で父親の介護をしているB氏の娘(長女・二女)は回答していた。また、F氏の長女は、「お休みの日に来ていただくというのもとても大変なことなのでは思うんですけど、私たちも素人なので、もうそれ以上よく分かんないんで。結果的に来ていただいたときは良かったかな。それで、こんなパンパンですねって、やっぱり(膀胱留置カテーテル)詰まっていたね・中略・ヘルパーさん、本人はうっとおしいみたいですけれども、ヘルパーさんたちも一応、確認はしてくれているんで。また、いつそうなるかって分からないんで。」と回答していた。C氏の夫は、「(訪問看護師に)来てもらえば安心だから。やっぱりほら、分かんないから、ケアマネジャーさんがこういう方法(訪問看護師に訪問してもらうこと)で、サービス全部やってもらって、1年たっでデイサービスを減らした。」と回答していた。

(2) 多職種連携

単語の中から連携職種を把握するため、抽出品詞は名詞で設定した。原文から得られた単語頻度解析の上位5位の結果が表2-2である。調査対象が7名であるがテキストデータ総行数の最高頻度は6であった。

「ケアマネジャー」は6名が使用していた。5名が「訪問看護師」、4名が「ヘルパー」、「自分」、「所長」、「本人」を使用していた。今回は「ケアマネジャー」と「訪問看

護師」について原文を確認した。

「ケアマネジャー」では、「私(ヘルパー)は(搞便)ができないんで、これは訪問看護師をお願いした方がいいですよ」ということで、即、ヘルパーさんの方からケアマネジャーさんに連絡入れてくれたのかな。多分、両方(ケアマネジャーと訪問看護師)、すぐ来ていただいたの、夕方。それは時間外で、緊急で来てもらって、2週間くらい便が出ていなかった。」「あのと、すぐやってくれたんです。ケアマネジャーさんもいたんだっけ。すぐに来てくれたね。夕方ぐらいいだね。これは大変だということ、もうそれは助かりましたね。私たち言われなきゃ本当に分からなくて。だから、変な言い方だけど、10日かそこら、便が出てないんじゃないかって言われたの。」とB氏の娘(長女・二女)は回答していた。また、「兄の今後、どうするかっていう話は色々としているんですけど、何かあれば連絡するって言ったから。今後、(兄が)歩けなくなったらどうしようかなと、ケアマネジャーさんには良く話をしている。・中略・何かあれば、ほら結局、ケアマネジャーさんを通してあるんで、ケアマネジャーさんが動いてくれれば私も楽なんで。」とD氏の弟は回答していた。E氏の娘は、「訪問診療の医師に、うちで話したことが割とすぐケアマネジャーさんに伝えてくれますので。例えば、こういう何でしょう。それだと何が合ったか・中略・ケアマネジャーさんとか包括さんの方でしてくださったみたいで、それはスピーディだと思います。」と回答していた。夫を介護しているA氏の妻は、「(連携について)あまり感じる事はない。ケアマネジャーさん、替わりましてね。お父さんの友達の息子さんになった・中略・前の方はベテランさんでしたか

表2-2 単語頻度分析

多職種連携(名詞)

単語	品詞詳細	頻度
ケアマネジャー	一般	6
訪問看護師	一般	5
ヘルパー	一般	4
自分	一般	4
所長	一般	4
本人	一般	4

ら、お年で辞めるって言って、もう深いことは聞きませ
せんけど。」と回答していた。

「訪問看護師」では、「訪問看護師さん、先がわかって
いるじゃない、このくらいなら、だんだんこうなってく
るというのと、見て、やって、そしてわかる者ないです
か。」とB氏の長女は回答していた。また、「デイサービ
スから訪問看護師に連絡が行くんでしょね。デイサー
ビスのノートには色々と。今日は何があったよというの
が、連絡表に書いてあるんです。」とD氏の弟は回答し
ていた。F氏の長女は「何かあったら、やっぱり医療を
上に置いていてくれるので、医療があって、その下
にケアマネジャーさんがいて、マッサージがいてみたい
な感じなので、全部ここをヘルパーさんじゃなくて、訪

問看護師さんを中心にコーディネートして、何かしてい
ると印象があります」と回答していた。

3) 対応バブル分析

(1) 訪問看護師の役割

利用者家族の属性と訪問看護師の役割の単語の関係を
見るため対応バブル分析を行った。対応バブル分析はク
ロス表を分析する際に利用される。標準化比率を計算し、
クロス表全体に対する比率を求め、全体に対して標準化
する¹²⁾。分析範囲は利用者家族のインタビューでの発語
を対象とし、抽出設定の頻度を4回以上かつ上位10位の
ものを図示した。また、抽出品詞は名詞とした。

対応バブル分析の結果は、利用者家族の属性と訪問看
護師の役割で上位を占めた単語との関係の強弱を図上の

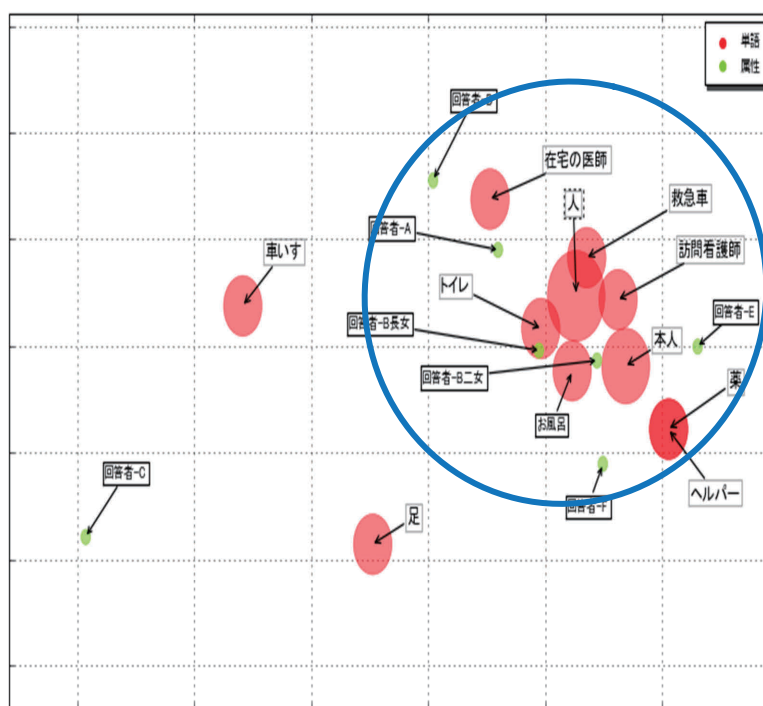


図1 対応バブル分析 利用者家族の属性と訪問看護師の役割で上位を占めた単語

表3-1 対応バブルチャート 訪問看護師の役割

単語	第1軸	第2軸	頻度
人	0.132	0.235	6
本人	0.344	-0.094	5
お風呂	0.115	-0.116	4
トイレ	-0.019	0.082	4
ヘルパー	0.527	-0.390	4
救急車	0.177	0.414	4
在宅の医師	-0.236	0.689	4
車イス	-1.292	0.188	4
足	-0.737	-0.930	4
訪問看護師	0.311	0.271	4
薬	0.527	-0.390	4

距離の遠近で表し、個々の単語の頻度はバブルの大小で表示されている。緑色のバブルは属性で、赤色のバブルは上位の単語である。青色の輪の中は、6名の利用者の家族（C氏の夫以外）がお互いに近い距離に位置している事を示している。

近い距離に位置している6名は、「人」、「本人」、「お風呂」、「トイレ」、「ヘルパー」、「救急車」、「在宅の医師」、「訪問看護師」、「薬」を多用していることが示されている。

このようにテキストマイニングでは、標準化比率からこの結果を導き出し、視覚化技術により利用者の家族の属性と訪問看護師の役割がどのような単語と近い関係にあるか、一目で表示できることからこの結果を導き出すことができた。

(2) 多職種連携

利用者家族の属性と多職種連携の単語の関係を見るた

め対応バブル分析を行った。分析範囲は利用者家族のインタビューでの発語を対象とし、抽出設定の頻度を4回以上かつ上位8位のを図示した。上位10位まで抽出したが、同じ順位の単語が15位まで抽出されたため8位とした。また、抽出品詞は名詞とした。緑色のバブルは属性で、赤色のバブルは上位の単語である。青色の輪は、「ケアマネジャー」、「人」、「訪問看護師」、「ヘルパー」と4名の利用者の家族が近い距離に位置していることを示している。利用者の家族であるA氏の妻とC氏の夫が青色の輪から遠い距離に位置していた。また、A氏の妻は利用者本人と近い距離に位置し、C氏の夫は訪問看護師よりも訪問看護ステーションの所長と近い距離に位置していた。

このようにテキストマイニングでは、標準化比率からこの結果を導き出し、視覚化技術により利用者の家族の

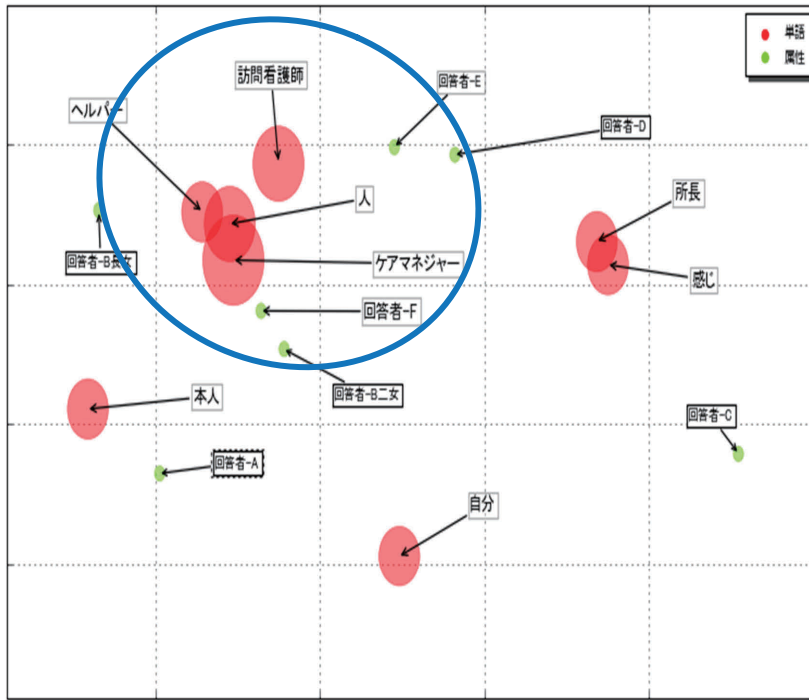


図2 対応バブル分析 利用者家族の属性と多職種連携で上位を占めた単語

表3-2 対応バブルチャート 多職種連携

単語	第1軸	第2軸	頻度
ケアマネジャー	-0.263	0.086	6
人	-0.274	0.215	5
訪問看護師	-0.126	0.430	5
ヘルパー	-0.358	0.258	4
感じ	0.875	0.070	4
自分	0.241	-0.971	4
所長	0.841	0.512	4
本人	-0.705	-0.445	4

属性と多職種連携がどのような単語と近い関係にあるか、一目で表示できることからこの結果を導き出すことができた。

VI. 考察

1. 訪問看護師の役割と多職種連携

インタビューに同意を得られた利用者家族は6組7名で、利用者は高齢者であった。当初、利用者からのインタビューも予定していたが、インタビューの内容が理解できなかったり、眠気が強く休まれており、利用者のご家族からのインタビューを実施した。

分析結果から訪問看護師の役割について利用者の家族は、石川¹³⁾が述べているように、「利用してみないと何をしてくれるのかわからない」、「自分達にわからないことに対応してほしい・相談にのってほしい」と考えていた。単語頻度解析の原文から、利用者の家族が安心して介護をしながら生活するためには、訪問看護師としてのフィジカルアセスメントができ、先を見越したケアの提供が期待されている¹⁴⁾。

また、対応バブル分析の結果から、「お風呂」、「トイレ」は利用者の生活に密着しており、「人」、「本人」、「ヘルパー」、「救急車」、「在宅の医師」、「訪問看護師」、「薬」は、利用者と利用者を取り巻くメンバーと医療面について示されていると考える。訪問看護師は医師の指示のもと、サービスを提供している。医療面だけを理解しているのではなく、利用者や家族の生活面をも把握しサービスを提供している。例えば、服薬管理では処方された薬剤が確実に内服できるかどうか、利用者や家族の生活状況を把握し看護サービスを提供している。つまり、セルフケアが可能かどうか、不可能な場合は家族の協力が得られるのか、他のサービスを導入した方が良いのか等、アセスメントした内容をケアマネジャーに報告し、サービスを調整している。

「足」、「車イス」は、それ以外のバブルや利用者の家族と遠い距離に位置しているのは、利用者の足の状態や車いすの移動を示しており、訪問看護師の役割とは直接関係しない単語であったと考える。

利用者の家族の属性と看護師の役割をみると、C氏の夫だけがほかの6名の家族とかなり遠い距離に位置している。C氏の介護者である夫は、介護者の中では唯一80歳代と後期高齢者である。ケアマネジャーのマネジメントのもと、訪問看護師・理学療法士の訪問が1回/週、デイサービスへの通所が1回/週であり、週に3回社会資源を利用している。ケアマネジャーのマネジメントに従い、訪問看護師や理学療法士の役割は理解できなくても、高齢の妻を介護しなければならぬため、ケアマネジャーが提供したサービスを利用していただけると考える。介護者が高齢の場合、介護保険利用において社会資源の導

入はケアマネジャーの裁量にゆだねられる。今後、日本の社会は更に高齢者人口が増加する。介護保険の要であるケアマネジャーは、利用者や家族が必要としているサービスを必要な時に必要なだけ提供できる事が望ましい。

次に多職種連携について、利用者の家族は介護保険を利用しているため、ケアマネジャーを中心に在宅生活におけるサービスがマネジメントされていると考えていた。B氏のケースでは、ヘルパーでは搞便ができなためケアマネジャーへ連絡をした。その後、ケアマネジャーから訪問看護師へ依頼があり、緊急訪問し排便コントロールができた。

A氏の妻とC氏の夫はケアマネジャーからの距離が他の家族より遠い。A氏の妻はベテランのケアマネジャーが退職し、現在のケアマネジャーに交代になり満足をしていなかったと考える。また、C氏の夫はケアマネジャーや訪問看護師、ヘルパーとは遠い距離に位置しているが、訪問看護ステーションの所長と近い距離に位置しており、訪問看護ステーションの管理者である所長を頼りにしていたと考える。

多職種連携における訪問看護師の役割¹⁵⁾は、訪問看護師が自身の役割を担い、まず患者の状態安定に寄与することが多職種との信頼関係につながる。在宅での連携は、患者の自分らしい暮らしの実現を目標とした連携、いわゆる現場での連携と、現場の円滑な連携を促進する組織間の連携の2つが存在する。今回のケースでは、新たなケアマネジャーが提供したサービスに、A氏の妻のニーズは満たされていなかった。また、C氏の夫は妻がどのように今後、在宅生活を送っていくのかが見えてないことを感じており、多職種連携が利用者の家族には見えていなかったと考える。

今回調査した利用者の家族からは、多職種連携に在宅の医師や理学療法士が上位8位にはない。在宅の医師の往診がF氏のみ1回/2週あるが、他の利用者は通院していたためだと考える。つまり、他のサービスもそうだが、自分が利用していないサービスのイメージは難しく理解できなかったと考える。介護保険の利用者の場合、ケアマネジャーは必ず関わる。今回調査したケースは、訪問看護師の訪問を全員が利用している。しかし、それ以外のサービスは多様であり、国が目指している地域包括ケアシステム、つまり自分らしい生活を継続するための多職種連携は、連携チーム側は理解していても地域住民には具体的な内容が浸透していなかったと考える。

診療所に実施した在宅医療の連携先の1位は、訪問看護ステーションであり、2位が居宅介護支援事業所である¹⁶⁾。自由記載で連携が上手くいっている要因の一つとして、ケアマネジャーとの距離が近く、迅速な対応やざっくばらんに話ができることや連携スタッフのすべて

が医療・介護制度について理解していると回答しているが、利用者や家族の思いは不明である。また、高橋¹⁶⁾は、訪問看護師は利用者を中心に位置づけ、多職種チームメンバーの多様な見方や技術、知識を調整できるように合意形成へのアプローチをすると述べている。住み慣れた地域（住まい）で生活ができるためには、介護保険の要であるケアマネジャーと多職種が連携しながら、医療も介護も理解している訪問看護師が利用者や家族に分かりやすく提供するサービスを説明し、チームをコーディネートすることが重要である。

2. 本研究の限界と課題

対象が少なかった事、地域が都内に偏っていた事、利用者が高齢のため認知機能の低下や眠気が強く休まれていたため、家族のみのインタビューになり、結果を一般化する事には限界がある。今後、介護保険の要であるケアマネジャーの連携に対する意識を調査したい。

Ⅶ. 結論

利用者の家族は、訪問看護師の役割について「利用してみないと何をしてくれるのかわからない」、「自分達にわからないことに対応してほしい・相談にのってほしい」と考えていた。多職種連携については、医療従事者がイメージしている連携と利用者の家族がイメージしているものとは違うことが明らかになった。

住み慣れた地域（住まい）で生活できるためには、介護保険の要であるケアマネジャーと多職種が連携しながら、医療も介護も理解している訪問看護師が具体的なサービスを利用者や家族に説明し理解を得て、チームをコーディネートすることが重要である。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきましたご利用者、ご家族の皆様、訪問看護ステーションの皆様から深謝申し上げます。

原稿内に論じられている主題または資料について、開示すべき利益相反関係にあたる企業などはありません。

引用文献

- 1) 内閣府：平成30年度版高齢社会白書（全体版）
- 2) 厚生労働省：地域包括ケアシステム
https://www.mhlw.go/stf/seikakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisya/chiki-houkatsu/2018.10.28
- 3) 全国訪問看護事業協会：訪問看護ステーション基本情報
<https://www.zenhokan.or.jp/new/topic/basic/>
2018.10.28

- 4) 森下安子, 山田覚：『Team Skills Scale』日本語版の開発と訪問看護師を対象とした測定、高知女子大学看護学会誌、41（2）、22-30、（2016）
- 5) 石川徳子：利用者家族が捉えた訪問看護、利用者の家族からのインタビュー・福祉職ケアマネジャーからのインタビューを通して、家族看護学研究、17（1）、20-30、（2011）
- 6) 日本財団：「日本財団在宅看護センター」が目指すもの
http://www.nippon-foundation.or.jp/what/spotlight/home_nursing/overview/index.html
2014. 7. 17
- 7) 上田太郎監修, 村田真樹, 小木しのぶら：事例で学ぶテキストマイニング、初版、共立出版株式会社、東京、（2010）
- 8) 服部兼敏：テキストマイニングで広がる看護の世界、Text Mining Studioを使いこなす、初版、33-52、ナカニシヤ出版、京都、（2010）
- 9) 前掲8）、86
- 10) 前掲8）、93
- 11) 前掲8）、173
- 12) 前掲8）、174-183
- 13) 前掲5）
- 14) 小笠原充子：訪問看護師の行っている予測的判断、高知女子大学看護学会誌、28（2）、21-31、（2003）
- 15) 谷口由紀子：地域包括ケア時代の多職種連携、高齢者・障害児者を対象とした多職種の連携における訪問看護師の役割、日本在宅ケア学会誌、19（2）、20-23、（2016）
- 16) ケアマネジメントオンライン、在宅医療の連携先－診療所の実態調査
<http://icare.iif.jp/mail/u/1?p=ljxxILD4LEIVbXAY>
2018. 10. 28
- 17) 高橋千里, 森下安子：訪問看護師による多職種チームメンバーとの合意形成へのアプローチ、高知女子大学看護学雑誌、36（2）、42-49、（2011）

代表著者の連絡先：石川徳子 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地

TEL：046-822-8772 FAX：046-822-8787

E-mail：ishikawa.tokuko@kdu.ac.jp